

京都大学人文科学研究所 人文研アカデミー

共同研究「フーコー研究—人文科学の再批判と新展開」報告書

『フーコー研究』（岩波書店）

出版記念シンポジウム



# 狂い咲く、フーコー

コメンテータ 重田園江（明治大学）  
森元庸介（東京大学）

日時：2021年3月27日（土）14:00～16:30

開催方式：ZOOM ウェビナー

\*お申し込みは、京都大学人文科学研究所HPにて  
<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>



# 共同研究「フーコー研究—人文科学の再批判と新展開」報告書

小泉義之・立木康介編

『フーコー研究』（岩波書店）

## 目次

### I 安全／科学／セクシュアリティ

小泉義之：疫病下のフーコー—死に照らされた深い革命

西迫大祐：配慮と不安を遠ざけるもの—『安全・領土・人口』におけるセキュリティについて

隠岐さや香：フーコーの「考古学」と科学史記述—「断絶説」をめぐって

坂本尚志：言説、科学、イデオロギー—「セクシュアリティの考古学」から「セクシュアリティの系譜学」へ

### II 啓蒙／批判／主体

佐藤淳二：フーコーと啓蒙—自己へのオデュッセイアへの途上で

田中祐理子：フーコーとカントの人間学—「私たちの知の根拠へと向かわせる秘密の道」をめぐって

松本潤一郎：死者の疎外論

藤田公二郎：主体とは何か

### III 言語／文学／芸術

森本淳生：フーコー「文学論」の射程—1970年のフローベール／サド講演を中心に

柴田秀樹：フーコーはいかにしてレーモン・ルーセルを読んだか

上田和彦：「文学」の失効を語るフーコーを巡って—統治性の変遷から見た文学の行方

武田宙也：フーコーと現代性の美学—「そうであるのとは違うように想像すること」をめぐって

### IV 狂気／人間／精神分析

立木康介：「精神分析の考古学」の行方

上尾真道：《Salvate animam meam》—フーコーの治癒の哲学

柵瀬宏平：狂気、主体、真理—フーコーとラカンにおけるデカルト的コギトをめぐって

久保田泰考：『狂気の歴史』と孤島—あるいは、フーコーによって書かれるはずもない「自閉症の歴史」について

王寺賢太：二重化するフーコー—1961年の人間学批判とヘーゲル、ハイデガー、カント

### V 運動／権力／(新)自由主義

相澤伸依：フランスの中絶解放運動とフーコー—GISの活動から

佐藤嘉幸：生権力／生政治とは何か—レイシズム、自由主義、新自由主義

中井亜佐子：「主婦化」するホモ・エコノミクス—新自由主義的主体の変容と未来

北垣 徹：権力の新たなエコノミー—眩しくて見えない／単眼で見る

### VI 真理体制／統治性／資本

箱田 徹：真理体制概念からアナーキーな権力分析へ—フーコー新自由主義論をめぐる論争を超えて

前川真行：生権力と福祉国家—ミシェル・フーコーの70年代

廣瀬 純：統治性論はなぜ棄てられたのか

長原 豊：人間の群れ—資本という近代と反復する本源的野蛮

### VII パレーシア／神／倫理

千葉雅也：生き様のパレーシア

丹生谷貴志：砂の上の〈監視〉と〈舵取り〉・ノート

堀尾耕一：パレーシアと民主制

布施 哲：せめて風狂であるために—パレーシア論について

市田良彦：ソフィストはいかにしてパレーシアストになったか